

教育研究所報

佐賀県立教育研究所

3 号

..... ◇ も く じ ◇

- 故金子一司先生を弔う (1)
- 佐賀県教育長 森 一郎
- 金子所長の急逝を悼む (2)
- 県教育研究所次長 須古 将宏
- 知能と創造性 (2)
- 所員 久保山幾男
- 学力向上と学習適応性 (4)
- 所員 木下 巧
- 歴代所長随筆
- 「三代目の苦勞」 (3)
- 第三代所長 深町 菊治
- 教育豆辞典 (5)
- 教育資料案内 (7)
- 教育内外通信 (6)
- ところどころ (3)
- 教育研究所コーナー (8)



故 金子一司所長

故金子一司先生を弔う

佐賀県教育長 森 一 郎

謹んで故金子一司君のみ霊に申し上げます。

一昨日、山中君から電話で君の訃報を受けたとき、何とも名状し難い衝撃をうけました。承れば、この数日、とても気分もよく、一昨日もすがすがしく、高伝寺の春をめでんと散策して帰って来たあとであったとか、誰がこの急変を測り知り得たでしょうか、私は一昨晩君のお宅を辞したあと、深夜、一人静かに君の面影を追って見ました。

聡明であった君、快活であった君、そして酒脱であった君。少なくとも私が君と接して来た限りに於ては、何が君をここ迄追いつめて来たか。未だに解くことの出来ない大きな疑問符として私の脳裡にかかっています。

思えば一昨年、多難であった学校教育課長の激職を離れ神埼高校長として赴任して日も未だ浅いある日、神埼高校で開かれた補導関係の会議に、張り切っているであろう君の姿に接するのを楽しみに、お邪魔したとき私は意外にも、何となく疲れたという君の言葉をきいて、気になりながらも激励したことがありました。

日が経てば気もまぎれ、元気を回復してくれるものとはばかり信じましたそれを期待していましたが、結果は逆へ逆へと走って行ったようです。そして去年の四月いろいろ相談した結果教育研究所に来て頂きました。内輪の者はもとより納富善六先生、西村芳雄先生をはじめ君の身の上は何れとなく心を配って頂く方々も、今度こそは静かに療養も出来研究の想を練り再び昔日の気力をとりもどし、以て大いに他日に備えてくれるものと期待したことでした。

併し結果は案に相違し、総てが取りかえしがつかなくなつた今、私は、もう少し何とかなる道があつたのではなからうか、とその道を探し得なかつたのが残念でならず、君に対し、又わが佐賀県教育界に対し誠に申し訳ない気持ち一杯です。ここに心から深くお詫び申し上げます。

殊に遣された奥様やお子様方のご心中を思うとき、断腸の念うたに禁ずる能わざるものがあります。

君の悲報一度伝わるや、君を知る程の人ことごとく、惜しいことをした立派な方だったのにと、君の急逝をいたみ、又かつて、君のけいがいには接した教え子達は、いい先生だったのにと、今更のように君を慕いつかしながらいます。

君が大学卒業以来、燃えるが如き熱情を以て、教育の道一すじに歩いて来たあとが急に大きく浮び上つて来ています。殊に佐賀県に赴任以来二十有余年、顧みれば最も多難であった時代に、学校現場の責任者として又本庁の責任者として君が果して来た大きな役割は実に測り知れないものがあります。今ここに離別の時にあたり、心から君の業績をたたえ、君をして遂に死に至らしめた、長年のご辛勞に対し、心から感謝の誠を捧げ君のご冥福を祈ります。

ここにいささか蕪辞を述べ微衷を披瀝して弔辞といたします。

願くは在天の英靈ほうふつとして来り受け賜はんことを。

合掌

＝ 葬 儀 の 記 ＝

前佐賀県立教育研究所長金子一司先生の葬儀は、4月16日、数多くの供花で飾られた精町善定寺において午後3時より厳粛に執り行なわれた。晴天に恵まれ、佐賀県知事代理長野総務部長、小松県教育委員長、森県教育長、水田県

議会議員、宮田佐賀市長はじめ、県教育庁や学校関係者、その他約250余人の焼香が続くなかで、県教育長、神埼高等学校後援会長、友人代表としての佐賀工業高等学校長、県教育研究所代表等の弔辞と国立教育研究所長はじめ120通の弔電披露が行なわれ、故人の人徳を偲びつつ、午後4時、なごり尽きない告別の式を終了した。

前所長金子一司先生は、4月14日突如として逝去された。あまりのことに、ただ呆然とするばかりである。無常迅速、まことに痛恨きわまりない。

先生は、昭和14年京都帝国大学文学部歴史科を卒業後、愛知県・長崎県を経て、昭和20年本県教育界の人となった。

明朗闊達な人柄、卓越した識見、加うるに真摯な実践活動は、つとに人の認めるところとなり、昭和22年には早くも県視学官に抜てきされ、新学制の創業に心魂を傾注した。ことに、新学制の趣旨徹底や、高等学校定時制の普及充実に尽した功績は特筆に値する。

教育委員会制度の発足後も引続き学校教育課で指導主事指導係長・課長補佐を勤めた。この間に行なった認定講習の立案と実施、教育課程改訂の伝達講習会の円滑な運営等の手腕はいずれも高く評価されている。

昭和31年40歳で白石高等学校長となり、35年鹿島実業高等学校長となる。学校経営に当っては、学校の個性発揮に

特に努力をはらった。

昭和38年再び教育庁に入り学校教育課長となる。高等学校生徒急増期に際し、募集定員の長期計画を樹立し、受入れ態勢を確立した。しかし、この頃から少しずつ健康を害していったようである。

昭和41年神埼高等学校長に転出したが、間もなく病に倒れた。その後小康を得ていたので、昭和42年教育研究所勤務となった。研究所在任中は闘病の連続であったが、よほど苦しい時以外は欠席しなかった。しかし、毎週定期に検診を受けていたし、ことに死の前日は常になく元気で、研究の討論にも加わっていたので、翌日の変事は夢想だにしなかった。

先生の生涯は不屈の精神をもって、教育に殉じたものと言うべきである。生前の功績に対して従五位勲五等に叙せられた。ここに先生の業績を回想し、謹んでご冥福を祈る。

金子所長の急逝を悼む

県教育研究所次長

須古 将宏

知能と創造性

所員 久保山 幾男

知能検査によって子どもの知的能力水準を知り、学習の可能性を判断する手がかりを得ることは、知能と学力の相関が+0.7前後と高いことからみて、きわめて妥当なことと思われる。新成就値・アンダーアチーパー（学力不振児）といった考え方も、知能と学力の高い相互関係をもとにした考え方である。

しかし知能の高いものが必ずしも低い知能の者より成績がいいとは限らないこと、集団の中には知能は低いすがれた成績をあげる子どもがいることなどの事実は、従来のように知能検査だけによって生徒の能力や適性を判断しようとした場合、ある型の子どもの力を見落とし、過少評価したりする可能性があることを示唆していると思われる。子どもが問題場面にあたって解決方向・方法を見出す場合にはたらく、知的能力の一つとして「創造性」が考えられ、それを測定するために創造性検査が開発されつつある。

表1は、学力に關する知能・創造性の分野を分析するために行なった創造性に関する基礎的研究(研究紀要第48号)のなかでA小学校4年の成績の一部である。この中で新成就値が、+7以上(オーバー・アチーパー)の4・5・10番の子どもは、知能に比べて創造性偏差値がいずれも高い。

こころみに知能の上位より20%(この場合、知能偏差値58以上)を高知能群、創造性上位20%(創造性偏差値57以上)を高創造群として、両群の学力・新成就値を比較したのが表2である。新成就値は小・中学ともに高知能群に比べて、高創造群が5%の有意水準で統計的に有意差があり、かつ優位である。このことから創造性が学力獲得に關与していることがうかがえるであろう。

さらにこれら各検査の内部相関は表3のとおりであった。すなわち学力と知能との相関について、小学4年では知能Bで0.67、知能Aで0.74であるが、中学2年ではとくに知能Bとの相関が低くなり、知能分化の傾向がうかがえる。学力と創造性でもやや低いが正の相関がみられ、学力向上要因として創造性をとりあげる意味もうなずけると思う。

検査名	番号	氏名													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
		O	T	T	H	S	K	J	T	M	H	T	Y	T	
		U	M	S	H	M	M	K	H	S	M	S	K	M	
標準学力検査 教研式 F型式	国語	58	56	53	48	54	56	50	56	65	48	45	58	49	
	社会	64	71	73	63	61	60	59	57	65	58	53	61	46	
	算数	47	54	49	47	48	47	42	59	51	42	50	51	41	
	理科	52	58	61	57	57	60	51	56	59	55	57	57	55	
	学力平均	55	60	59	54	55	56	51	57	60	51	51	57	48	
知能検査 教研式 新制学年別	B式	56	63	54	37	45	68	47	61	68	32	48	55	48	
	A式	61	58	57	52	46	55	54	57	62	37	41	56	51	
	総合	60	61	56	45	45	62	51	60	67	33	43	56	50	
知能対応平均学力偏差値		57	58	54	47	47	58	51	57	62	38	45	54	50	
新成就値		-2	2	5	7	8	-2	0	0	-2	13	6	13	-2	
創造性検査 東心式 (研究版)	流暢性	51	73	61	65	52	61	48	68	46	42	56	59	51	
	柔軟性	51	69	64	62	49	60	49	68	45	44	53	57	47	
	独創性	52	68	56	63	41	55	61	61	42	48	53	57	54	
	具体性	50	72	64	62	54	65	47	72	44	46	43	57	44	
	総合	51	70	61	64	49	60	51	68	44	45	52	56	50	

小学校4年 193名

区分人数	創造性SS (SD)	知能SS (SD)	学力SS (SD)	新成就値 (SD)
1.高知能・創造群 14名	64.4 (5.3)	63.7 (3.4)	59.0 (3.1)	+0.1 (2.3)
2.高知能群 30名	48.1 (5.7)	61.2 (4.1)	56.8 (4.1)	-0.8 (3.7)
3.高創造群 28名	63.0 (4.9)	49.5 (8.5)	52.2 (6.7)	+2.4 (5.2)

中学校2年 1,44名

区 分 人数	創造性SS (SD)	知能SS (SD)	学力SS (SD)	新成就値 (SD)
1.高知能・創造群 19名	63.2 (5.0)	63.8 (4.9)	60.1 (5.6)	+0.4 (3.7)
2.高知能群 22名	49.6 (4.7)	61.8 (4.6)	55.4 (7.5)	-2.8 (6.6)
3.高創造群 19名	62.5 (2.3)	48.1 (6.9)	50.3 (7.3)	+1.5 (6.2)

小学4年について

テスト・バッテリー	学 力	知能B	知能A	流暢性	柔軟性	獨創性
学力(標準学力検査4科)						
知能 B式(非言語式)	.67					
知能 A式(言語式)	.74	.68				
創造性 流暢性	.36	.31	.36			
創造性 柔軟性	.43	.36	.43	.85		
創造性 獨創性	.33	.26	.35	.77	.75	
創造性 具体性	.47	.38	.43	.81	.84	.71

中学2年について

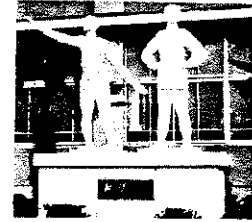
テスト・バッテリー	学 力	知能B	知能A	流暢性	柔軟性	獨創性
学力(" 5科)						
知能 B式(")	.55					
知能 A式(")	.70	.70				
創造性 流暢性	.39	.33	.42			
創造性 柔軟性	.40	.37	.46	.91		
創造性 獨創性	.29	.27	.43	.80	.79	
創造性 具体性	.43	.39	.50	.87	.93	.76

昭和37年から自主的に研究をはじめた、理科研究の成果をみせてくれるかのように、めぐりく春とともに百花咲き乱れ



花ざかりの桜岡小学校園

ている。チューリップ、水仙、もくれん、つつじ、金せんか、ひなぎく、花だいこん等々……
情操教育方面までにも役立ってくれたらと念じつつ…。



校庭にある希望像

神野小PTAでも教材教具充実の一助にしたいと考え、教育設備助成運動の協賛マークを集めております。

- 1.子供たちが持ってきて各商品別に木の箱に入れる。
- 2.各商品別に、マークを一定の点数に貼ったり袋に入れる。
- 3.助成会への発送
 本年は六月・八月・一月の三回作業することにして
 おります。ドッチボール一個でもとりたいと張り切
 っております。



三代目の苦勞

第三代所長 深町 菊治

明るい記事にしたいところであるが、小生の赴任した昭和31年頃は庁の内外にきびしい研究所無用論があり、それに県財政最低のため各課共予算は昨年度予算の何割引きという具合で研究所の年間総予算が37万 5,000円という今頃信じられない額であって、時の次長が或時こうなつてはベントウ持って中食喰べに来るような気持ちで時の来るのを待つより仕方ないですよ、と笑われた事もあった。それに加えて、従来あった教育研究所は県の設置条例でおかなければならないというようになって、全国各地にそれが続々と実現しつつある最中であつて、条例化の出来ない所は自然消滅というぎりぎりの年においつめられたものであつた。一方国立教育研究所の音頭とりで、全国研究所が統一問題で全国的調査研究をすることになって本県にもその割当てが与えられた。県財政の都合で各部の試験、研究機関の統廃合が着手されたのもその時で、教育庁関係唯一のそ

れである教育研究所がねらわれたのは当然であつた。県の職員さん達が10数人或朝不意に来所されて、ここはどんな事をしているか、とのご質問を受けたのは所長にとって却って幸いであつた。一々必要性を説いてまわるべきところ、県会では教育研究所はどうするのかのビックリ質問があつたりして、気の休まれない2ヶ年であつたが、それでも所から提出した県立教育研究所設置条例案が満場一致で可決された時の感激は今も忘れない。教科書センターを設けたり手狭のためにと所の分室を設けたりしながら、所の研究物を何よりの指針として日々の教育実践に生かしているという現場の先生の声にはげまされたものであつた。

県下教育の実態を科学的に把握し、それに即応して教育向上をめざす活路を見出すためには研究所の研究を盛んにする事が肝要である。研究所の御発展を祈つて止まない。
(筆者は現在久留米大学付属高校講師であられる)

学力向上と

学習適応性

所員 木下 巧

この研究は、高等学校生徒の学業成績変動の要因を学習適応性の面からとらえようとするものである。

I 学力検査、昭和42年度高等学校第1学年に当教育研究所が実施した4月と翌1月の2回にわたる一斉テストの結果を基礎資料とした。

II 学力動向の基準、それぞれの2回のテストを受験者全員(普通高校約6000名)を対象として科目別(国語、数学および英語)に偏差値(T得点法)換算を行ない、第1回テストの3教科平均偏差値を基準とし、第2回目の偏差値と比較した。この場合、正規分布曲線にもとづいて0.5σ(σは標準偏差。この場合標準偏差が10であったので、0.5σは偏差値で5点)をもって成績動向とみなし、0.5σ以上変動し成績が向上している生徒群と下降している生徒群とを類別した。

III 学習適応性検査、成績動向におよぼす要因を分析するために教研式学習適応性検査を42年12月～翌1月に実施した。

類別した対象、鳥栖、佐賀北、鹿島、伊万里および唐津西の普通高校から各1級を抽出した。(計 254名)

成績向上群と下降群の学習適応性

学力検査の成績が向上した生徒群と、それが下降した生徒群の学習適応性検査結果を比較して、下位テストの14項目についてどのような差異が見られるであろうか。下にそれを示した。

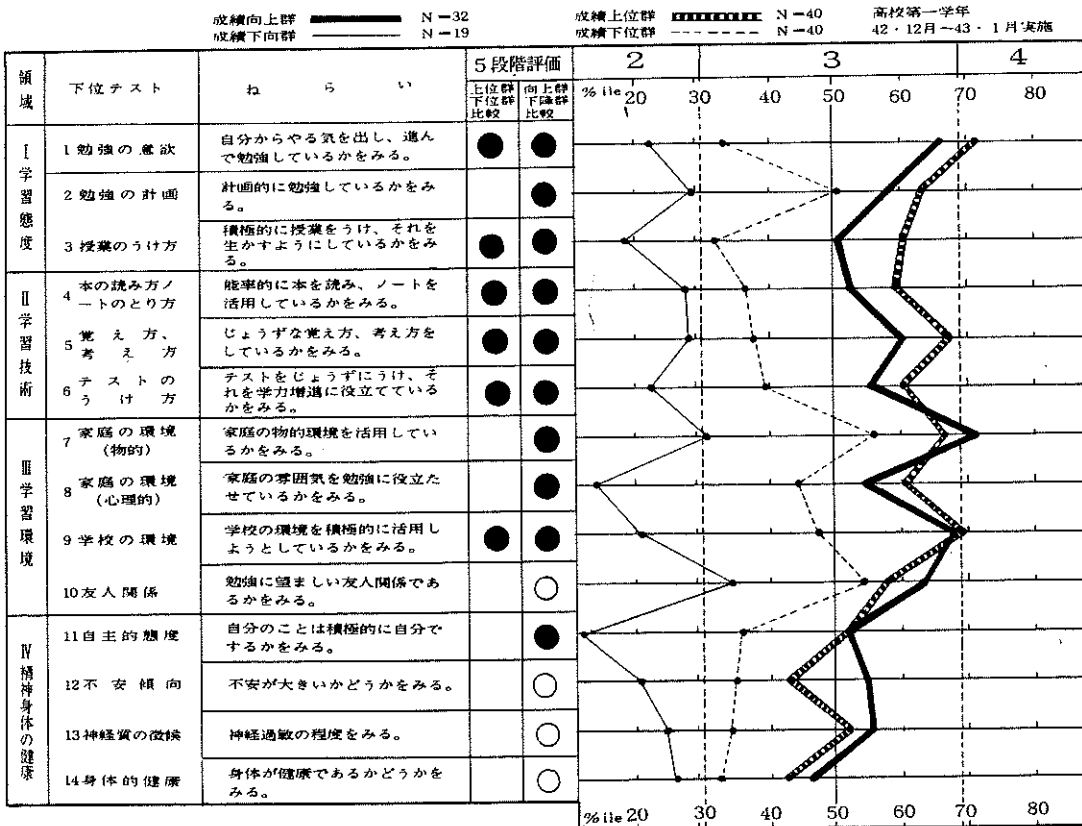
成績が向上した生徒群に見られる学習適応性は、身体的健康の項を除いたすべてに50%ile以上の値を示し、好ましい学習場面への適応といえる。

一方、成績下降群においては、30%ileを上まわる下位テストはなくそのすべてが5段階評価の2であって、不適応の傾向を示している。特に学習意欲、授業の受け方、テストの受け方、家庭の心的環境および自主的態度が目立ってよくない。

このように、成績向上群と下降群における学習適応性検査のすべての下位テストに差が大きく、統計的にも有意差がみられるのである。

これらのことから、特に学習態度、学習技術、および学習環境の領域において、成績向上群のほうが下降群に比較して学習場面への好ましい適応を示しているといえる。このこと

学習適応性検査診断プロフィール



* 同群の平均の差に有意差があるかどうかを、検定した結果、●印は1%以内、○印は5%水準で有意差のあることを示している。

* 254名の中で、3教科平均点の上位から40名を成績上位群とし、下位から40名を成績下位群とした。

はまた、成績上位群と下位群の比較においても云える。つまり、上位群と下位群の学習適応性の差は成績向上群と下降群ほどの大きいものではないけれども全般に同じ傾向をもっている。特に学習態度、学習技術の領域、および学校環境に差がある。

要するに高等学校1年生において、学業成績が向上あるいは、成績が上位にあるものは学習技術、学習態度の領域により好ましい学習適応性を示している。

学習態度にあらわれた両群の傾向

(1) 成績向上群に勉強の意欲のあるものが多い

成績向上群が下降群よりも勉強の意欲が高いといえる。

この勉強の意欲の下位テストをさらに、両群の反応の差が大きい傾向にあるテスト項目を掲げた。

表1

勉強の意欲	内 容	成績向上群	成績下降群
		自分から進んで勉強する。	60%
	勉強しなくてはと思いがなかなかかきのりがしないことがよくある。	34	68
	勉強しようと思ってもなかなかすぐにとりかかれぬ。	3	37
	勉強するために机に向ってもいつもすぐいやになる。	3	26
	勉強してもつまらないと思うことがよくある。	0	32
	勉強中にも思いにふけるとかぼんやりと時間をつぶすことがよくある。	19	58

これからすると、成績向上群は自分から進んで勉強しようとする傾向が強い。しかし、学習に気乗りのしない時や時間を空転させる生徒も2〜3割はいる。が、下降群との比較においてはその占める割合が非常に少ない。

成績下降群では、自分から進んで学習しようとする姿勢にあるものが2割にすぎない。しかも、学習の過程において気乗りのしないもの、ぼんやり時間をつぶすことがよくある生徒が6割も存在し、さらに学習の持続性がない—根気がない生徒が多い。

学習効果を向上させるものは生徒自身である。まず、生徒の学習意欲を昂揚させるような指導が特に成績下降群の生徒に必要であろう。たとえば学習への興味や変化をもたせることによって学習への自信と安堵感を生徒に抱かせることも、勉強の意欲を高めることに通じるであろう。

(2) 授業の受け方も成績向上群に望ましいものが多い。

学校における授業の受け方においても成績向上群と下降群の差が大きい。この下位テストをテスト項目ごとに両群を見

表2

授業の受け方	内 容	成績向上群	成績下降群
		学校での科目の中で学習の程度が高いと思うものがたくさんある。	3%
	授業がよく解らないのできることがよくある。	3	32
	いつも国語・数学などの予習はしない。	28	42
	学校で習ったことはできるだけ早く復習することはしない。	38	47
	宿題はいつもまっさきにかたづけぬ。	38	21
	勉強のあと、ワークブックなどで力をためずことはしない。	31	58
	授業中、ぼんやり、おしゃべりして先生の話を聞かないでいることがよくある。	3	58

てみよう。成績向上群は各教科の授業がほとんど理解できる



1. 評価の規準について
教育評価は教育の成果や過程について、それがよかったか悪かったかの判断をすることを含んでいる。このためには規準 (standard) と基準 (norm) の二つを本質的に必要とする。規準は少なくともかくかくでなければならぬとする教育の目標水準であり、基準は現にかくかくであるという教育の現実水準である。評価はこの規準と基準との対決によって営まれる活動であり、両者の落差を確認することであるといえる。さて教科の学習評価においては、規準のおき方で次の三つの評価の立場が考えられる。

知能検査、学力検査の結果を組み合わせて学力を診断する考え方 (その一)

① 絶対評価…子どもの学習活動学力の実態とは直接には関係なく、たとえば学習指導要領の学年・教科の目標内容に規準を求め、子どもの成績をこの規準に照らして評価する立場である。

② 相対評価…子どもの学習活動の中に規準を求める場合で、一般にはその集団の成績の統計的平均を規準として個人の成績を評価する立場である。

③ 個人的評価…子ども個人ごとにそれぞれのもつ能力を規準として成績を評価する立場である。そして個人の規準 (能力) は、今日の教育測定学の水準では、知能検査で測定された知能を用いるのが妥当と考えられている。

(図書文化社・教育評価の技術より)

ので、授業中にぼんやりすることもなく集中できるのであって、授業の程度が高いと意識するものはほとんどない。

成績下降群では、その時間の授業が理解できない (約3割) ので、ぼんやりあらぬことを思案したりして、教師との授業から逸脱している生徒が6割も存在する。だから各教科の学習程度が高いと思うのであろう。

また、予習・復習については両群とも好ましい状態ではない。とくに下降群に対する予習・復習の指導が望まれる。

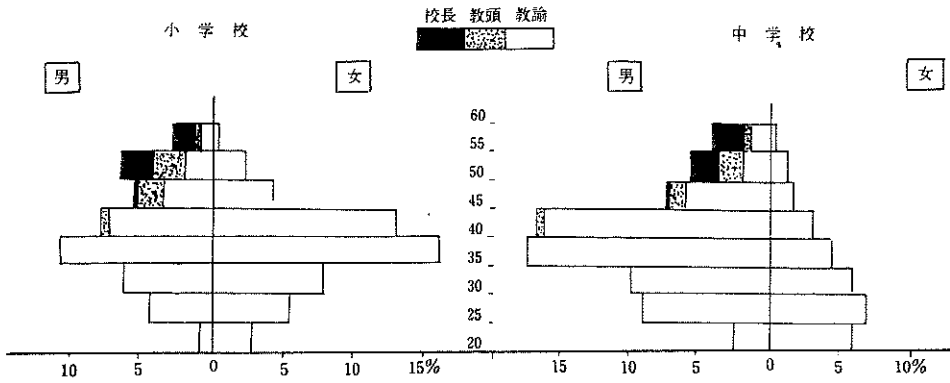
ともかく、学習の中心は学校の授業であるはずである。学校の授業が望ましくないのではほんとうの勉強の姿とは云えない。授業に対する不適応をもつ生徒には授業の受け方を改善させる必要がある。同時に教師の授業に対する工夫も考慮されねばならないだろう。

おわりに

生徒の学力が伸びる要因を探るために、一斉テストを基礎資料として成績の向上した生徒群と下降群とを対象に、両群の学習適応性からそれをとらえようとした。この結果、成績向上群と下降群の学習適応性はほとんどの検査項目に有意差があって、特に学習態度、学習技術の面で両群の差が著しく大きくなっている。成績が下降した生徒はもちろんのこと、成績が向上した生徒においても不適応の面を改善する指導を長期にわたって実施すれば、より望ましい学力が期待されるであろう。なを、この研究の詳細については当所研究紀要49号を参照せられたい。

佐賀県教員性別年令別構成

(昭. 42. 5. 1 現在)



佐賀県教員の職務別構成 (実数)

	小学校		中学校	
	男	女	男	女
校長	168		101	
教頭	175	1	99	1
教諭	1,218	1,902	1,552	674
計	1,561	1,903	1,752	675

全国教職員年令別性別構成比率 (40年度 指定統計第9号)

	小学校	中学校	高等学校	
	計	100.0	100.0	100.0
19歳未満	0.1	0.0	0.0	
20 ~ 29	20.6	26.6	30.2	
30 ~ 39	45.3	45.7	34.3	
40 ~ 49	22.0	17.6	17.7	
50 ~ 59	11.9	9.7	13.6	
60以上	0.1	0.4	4.2	
平均年令(歳)	38.0	36.2	37.8	
男女比	男	51.6	74.6	82.7
	女	48.4	25.4	17.3

今年度も新採が少なかったもので、現在の年令構成は更に脚の細いものになっているであろう。

近年女子の比率増大は全国的な傾向であるが、中学校においてさえ25歳以下では圧倒的に女子が多い点を注目すべきである。

(本県統計資料は教職員課より)

○全教連共同研究「家庭と子ども」部会

43年度の本調査にそなえ、1月下旬に小学校5年~中学校3年の児童・生徒とその両親を対象に、サンプリング調査と事例研究を行なうことになり、本県では宗所員担当で、東と賀小学校の協力を受け、校区内の50世帯について実施した。

各県の調査結果は2月中に集計を終えて国研に送られ、3月中には全国集計がまとめられる予定である。

○43年度全教連総会および研究発表大会

5月22日~24日 長崎市で開催

当所からは須古次長が「学校経営上の問題点に関する校長

の意識調査」を発表する。

○鹿児島および宮崎県の教育センター着工

かねて計画を進められていた鹿児島県および宮崎県の総合教育センターは、いずれも昨年11月下旬に着工し、4月現在すでに3階までのコンクリート打ちを終って、今秋には開所するよう職員の発令も終わっている。

このほか、センター未設置県のうち、青森 富山・岐阜・福井・島根・徳島等が 明治

100年記念事業を兼ねて既に建設を決定し、大分は用地買収費 2,800万円を計上済みという。



当所には、教育研究用としての専門図書約1,400冊、および研究紀要約3,700冊、(主に全国教育研究所交換分)を備え※

教育資料案内

※ております。学校教育、社会教育に携わられる方々の研究の便宜をはかって貸出しもいたしておりますのでご利用ください。

○日本教科書大系 近代編 全27巻 講談社発行 (1巻約600ページ 3800円)

本年は明治100年に当たるが、わが国最近100年にわたる歴史において、近代学校制度を実施してこれが驚くべき成果をあげた著しい事実は内外において広く認められている。特に小学校が普及して高い就学率を示したことによって、今日に至るまでの国民形成の基礎が築きあげられた。この小学校において如何なる教育が行われたかは、国民の思想を形成し、生活や文化を決定してきた重大な要因となっている。小学校における近代教育の実践は教科書を使用して、授業を行うことが一つの特色となっている。最近100年間にわが国初等教育の教科書は驚くべき発展をした。

小学校において使用された教科書は教科書制度によって三つの時期に分けられる。第一は明治初年から明治20年頃までで、教科書が民間と文部省から自由に出版されていた時代、第二は明治20年頃から明治35年頃にかけて検定制度を実施していた時代、第三は明治36年から昭和22年新しい学校制度による検定教科書が使用されるに至るまでである。

この日本教科書大系近代編においては明治初年から現制の検定制度実施に至るまで80余年にわたる間の小学校教科書の原典を、教科目の体系によって類別し、各学年別に活字版にして集成してある。

○児童・生徒の正しい理解 (実践編)

～ひとりひとりの子供をのばすために～ 昭. 43.3

鹿児島県立教育研究所

児童、生徒のなかには、もの言わぬ子ども、内向的な子ども、あるいは学力の向上しない子ども等、数多くの非社会的な子どもがいる。それで非行児も含めてすべての子どもの正しい理解のしかたとその指導法についていくつかの立場と事例によって述べてある。

また、生徒指導というと何か補導的色彩が強いが、そのような補導的な一面のみからでは、多くの指導効果を期待することはできない。学習指導面と一体化された理解と指導によってこそ、その効果は大きい、別の言いかたをすれば、知能・学力・性格・環境等を正しく理解することにより、生徒指導が生かされるし、学力も向上する。このような考え方に立って調査研究し、まとめあげられた冊子である。

○教育研究所学力調査報告書 ～小五～

(国語・算数・理科・社会) 昭42.1

鹿児島県立教育研究所

全国学力調査にあらわれた問題点を追跡調査し、県内学力の実態をしらべて、分析し、学校における指導改善の資料とするため、鹿児島県立教育研究所で、鹿児島県内の小学校5年

児童(抽出調査)を対象に、国語・算数・理科・社会について昭和42年1月に実施した報告書である。

内容は、教科別、学校別規模別、地域類型別、男女別に分析考察してあるが、その一例を述べてみると、地域別の平均得点の分布から国語、算数に共通していえることは、伸びなやんでいるのは、へき地、準へき地でなく、むしろ農山村、その他に類型づけられた学校ではなからうかと、資料を考察しながら言及してある。四教科とも指導上たいへん参考となる報告書である。

○教育実践のための教育研究法 昭. 43.3

宮崎県立教育研究所

[子ども理解、学級経営、進路指導編]と[学習指導編]の2分冊からなっている。内容は、前者では原則論から調査の手順、調査結果の集計、考察のしかた、累積記録のとりかた、後者では、学習指導の原理や、各教科の特質、指導段階にそった授業研究の方法や、学力評価の研究法等、具体的にわかり易く述べてあり、教育現場にとってたいへん参考になる図書である。

○学習指導の近代化に関する研究

～教師の学習指導観について～ 昭. 43.3

宮城県教育研究所

調査の趣旨として巻頭に、「学習指導改善のための研究課題はいろいろあるが、発見的、創造的学習の成立条件の究明にとり組むことが急務であると考えた。その発見的、創造的学習の確立に不可欠なのは、それにふさわしい学習指導観を個々の教師が堅持することである。そこで発見的創造的学習の継続研究の第一歩として、教師の学習指導観の調査の県下の小・中学校の教師を対象に実施した。」と述べてある。

学習指導観の要素的なものとして、学力観・教材観・指導過程観・学習形態観等にわけ、これを国語・社会・数学・理科の四教科について調査し、さらにこのほかに、一般的な指導理念に関する質問ならびに、子どもの創造性に関するたとえられている子どもの行動について、教師の指導観を調査してある。

最近さげばれている、発見的、創造的学習に関する問題点を探るための参考となる資料である。

○学習意欲に関する調査研究

昭. 43.3 熊本県立教育研究所

学力向上の要因として大きくとりあげられている学習意欲について、「生徒の意欲ならびに実態」「教師の意識」を調査し、特に「それを阻害している問題点」を分析検討すると共に、学習意欲向上のために実施されている具体的指導対策も加えて、県内24校について調査してある。

当教育研究所の概要は次の通りである。

◎教育研究所の職員

宗正男、向井正之、久保山幾男、田中照、木下巧
畑瀬園子

◎研究調査の概要

●主題 「家庭と子ども」に関する調査研究(全国共同研究)

●目的 日本の家庭が、今日いかなる教育機能を果たしつつあるかの実態を、家庭の教育機能をささえている条件と、子どもの生活や意識のうえにみられる問題点との関連において明らかにし、これからの家庭教育のあり方を考えていくのに必要な基礎資料を提供しようとするものである。

●本年度計画

- 1、本県が担当する調査地域一農村地域
- 2、調査地点抽出一5地点(1地点50世帯)
- 3、全国サンプリング調査の実施(6~7月)
- 4、ケーススタディの実施(10~11月)
- 5、研究報告書の完成(2月末までに)

(担当所員一宗正男ほか研究委員9名)

●主題 農村児童の学力向上方策の実証的研究

~国語、算数、理科の学習指導上の問題点とその対策~

●目的 前年度(第一年次)に児童の知能、

学力、学習適応性、生活環境等について実態調査を実施し、分析、検討した結果を手がかりとして問題の所在を明らかにし、学力向上のための教材内容や指導の研究をする。

●本年度の計画

- 1、前年度の調査結果の検討、問題点の究明
- 2、今年度の研究方法の決定
- 3、指導法改善のための実験授業の実施検討、追跡調査の実施(6月~12月)
- 4、反省、ならびにまとめ(1月~2月)

●主題 学習指導の近代化に関する調査研究(全国共同研究)

●目的 「学習指導の近代化」の課題の中から、発見的・創造的学習に関する問題を取りあげ、「発見的・創造的学習はどのような組織・構造をもっているか。またそれが成り立つ条件は何か」について、学習指導を通して実証的に研究をすすめて学習指導法の改善に資することを目的としている。

●今年度本県が実施する具体的事項

- (1) 小学4年から中学3年までを対象として、理科学習

指導後の評価テストと知能・創造性の相関をもとに、学力因子の分析、究明を行なう。

- (2) 子どものもつ概有知識・経験の量や質が、問題解決における着想や思考転換に関係するのかを、理科学習指導を通して究明する。

(担当所員一久保山幾男ほか研究委員7名)

●主題 小中学校における生活指導に関する調査研究

~子どもの価値感形成における諸要因について~

●目的 家庭と地域社会の環境的諸条件が、子どもの人格形成に与える影響を分析的に研究し、学校、家庭、社会の相補関係を強化するための手だてをさぐりたい。

●本年度計画

- 1、4月 前年度の反省、検討、本年度の計画
- 2、5月~6月 調査問題作成、調査打合せ
- 3、7月~9月 調査実施、ならびに個人面接、調査集計
- 4、10月 調査結果の考察
- 5、11月~12月 報告書の作成
- 6、1月~2月 報告書の印刷と校正作業、報告書完成

(担当所員一向井正之ほか研究委員8名)

●主題 「中学校数学科における能力差に応じた指導法の研究

●目的 生徒の数学についての能力差が大きく、それが一斉指導において学習効果を阻害している。したがって自然学級の中でどのように個別化をはかり能力差に応じた指導をしたがよいか教材内容と指導形態の両面から研究する。

●本年度計画

- 1、主題に対する研究方法の検討 4~5月
- 2、研究協力校および研究委員との打合せ 5月
- 3、調査研究 6~12月
- 4、調査結果の考察と中間まとめ 1~2月

●主題 高等学校における学力推移の実態について

●目的 1、高等学校第1学年の生徒はどのような基礎学力をもって入学したかを課程別・学科別のテスト問題(国・数・英)でとらえる。本年度は昨年度と同一テスト問題で実施して、その結果から中学校および高等学校1年生の学力に関する問題をとらえ、さらに1年終了時に再び一斉テストを実施して、当該学年の一ケ年における学力の推移の実態を把握し基礎資料を得ることをねらいとする。

2、昨年度に引き続いて2年生を対象に学力向上のための要因を学力検査・性格検査・興味検査等を実施して追跡研究を行う。(担当所員 木下 巧)



故金子一司所長
の急逝に際し、
本号は追悼号と
して企画編集し
ました。

巻頭には県教育
長森一郎先生から県教育界に奔走
された金子先生への弔辞をいただき
ました。

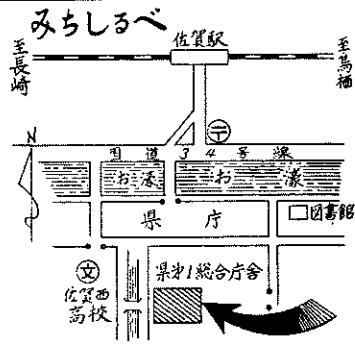
また、当所次長が研究所を代表して
故金子所長の急逝を悼み、年符的に
銘記しました。

歴代所長随想には、第3代所長深
町菊治に登場していただきました。

論攻では、久保山幾男所員の「知
能と創造性」は生徒の能力や適性を
より妥当に把握するために、知能の
みならず、創造性の分野をも重要視
せねばならないと説く。

高等学校1年生を対象として、生
徒の学習適応性の面から学力が向上
する要因を導きだそうと試みた木下
巧所員の「学力向上と学習適応性」
もみのがせないものである。

五月の空に、大きな鯉が舞い、樹
々も新しい息吹をみせる今日この頃、
私達も雄々しき教育者でありたいと
念じながら。



第3号
発行年月日 昭和43年5月1日
編集・発行 佐賀県立教育研究所
佐賀市城内1丁目6-5
TEL ④2111内線437
印刷 KK みづほ印刷